

海岸観光地名の分布と変化

鏡 味 明 克

1 はじめに

海岸の観光地名については、これまでもしばしば注目して、商業地名の変遷の研究の中で部分的な調査報告を執筆してきた。海岸の名勝地「舞子」「須磨」を模倣した地名については、早く1991年に「温泉と海水浴場の駅名」を『鉄道文学』第4号に執筆指摘し、詳細は「関西型通称地名の分布と動態」『関西方言の社会言語学』世界思想社（1995）の中で、駅名以外のすべての確認例について紹介考察した。観光地名としての海水浴場の海岸名に英語のビーチを使用する流行は、沖縄では特に顕著であるが、沖縄だけの新傾向ではなく、全国規模で進行中であることを、分布図を提示しながら、本誌第34号に執筆した「カタカナ書き商業地名の展開」の中で論述した。

本稿では、これらの海岸地名について、最新の資料を加えて、海岸観光地名としての全体的な概括と展望をおこなうものである。

まず、「舞子」等の名勝模倣地名について、その後の確認例を加えて概括し、この種の模倣地名についても、カタカナ書き地名の最近の傾向についても言及する。「舞子」等の分布図はこれまで提示していないので、ここに新たに作成する。

次に、「ビーチ」については、本誌34号に掲載した2004年作成の分布図に対して、2007年の最新の増加確認図を提示するとともに、十数年前の分布状況を、所蔵の旧版の県別地図帳、観光ガイドブックなど（1995年前後のもの）によって確認して、「1995年ごろの分布図」を描き、今日に至る拡大の状況とその地域差を考察することにした。県別の地図資料では昭文社版が一番揃っている

が、『JAF ルートマップ』『ミリオン道路地図』その他出版社によるちがいもある。インターネット検索による調査もこれに加えた。このような通称地名になると、よほど著名なものは共通に挙がっているが、かなり恣意的に採られたり漏れたりする名が少なくない。可能な限り各種版によって補い、総合判断した。

2 海岸名勝模倣地名

最近は新たな例が付け加わることはまずないが、かつてはいわゆる白砂青松の海岸の名として、神戸市の舞子、須磨の海岸の名が全国各地に模倣を生んだ。時代のわかる駅名に限定してその諸例をまず挙げると、まず、北陸本線の小舞子駅（石川県）は明治36年開駅、近江舞子駅は新しい湖西線の駅（昭和49年）であるが、江若鉄道時代にも近江舞子駅（昭和15年雄松駅を改称）があった。名鉄の新舞子駅は明治45年開業、同じく新須磨駅は大正4年開駅で昭和56年碧南中央と改称した。宮城県には今のJR仙石線の前身、宮城電鉄に東北須磨駅があり、昭和6年開駅、昭和19年に現在の野蒜駅に改称されている。以上が鉄道関係の舞子・須磨であるが、すべて第二次大戦前の開駅で、戦後の命名はない。そのほか、確認した舞子、須磨の地名は次のとおりである。まず、出自の神戸市に一番近いところでは、同じ兵庫県に新舞子（たつの市。旧御津町）があり、海水浴場、潮干狩りで賑わう海岸である。新舞子と「新」を冠する地名は、ほかに大分市の新舞子浜、上記の愛知県知多市の新舞子、千葉県富津市佐貫の新舞子、福島県いわき市四貫の新舞子がある。そのほかの舞子では、石川県の小舞子駅（白

山市)の南どなりには加賀舞子(小松市)、島根県江津市には石見舞子浜があり、これらが近江舞子とともに国名を冠する型である。そのほか、地元の小地名を冠した井田舞子の例がある(三重県紀宝町。井田舞子のバス停がある)。須磨には広島県呉市仁方に「安芸の小須磨」海岸があり、小舞子と同じ型である。愛知県の駅名にもなった新舞子、新須磨はいずれも海水浴地として繁栄、今は沿岸の工業化によってその面影はなく、新須磨は上記のように改名、新舞子は新舞子マリーナパークを造成して再生が図られている。

図1に以上の舞子・須磨の分布図を描く。数が多いわけではないが、このように全国規模で模倣名が認められる。本拠地との区別名称は、「新」「小」「国名」の3種で、このことは、舞子にも須磨にも共通している。「東北須磨」はちょっと異例であるが、国名の類例といえよう。地元の名を冠した例は井田舞子の1例しか見出されなかった。

図1は次の基準で描く。図の凡例は次の通り。舞子(出自。この地名の本拠である)、小舞子、新舞子、～舞子。同様に、須磨(出自)、小須磨、新須磨、～須磨。駅名化されたものは図中の小図に表示した。舞子、須磨ともに本拠にも駅名(JR)があるので、それぞれを大きい符号で表示した。東北須磨の例以外は近畿の周辺に集中といえよう。

そのほか、図示は略すが、いくつかの名勝模倣名も認められる。静岡県下田市の和歌浦などは1例のみの模倣名であるが、二見の浦などはかなり各地に例がある。ただし「二見」は何らかの二分される地形で本来の名のものも多く、一概に模倣名とはいえない。その中で、国名などを冠し、夫婦岩が存在するような条件のものは伊勢の二見浦の模倣であろう。

たとえば、大分県上浦町の「豊後二見ヶ浦」、石川県珠洲市の「能登双見」、山口県の山陰本線に長門二見駅(大正14年)がある二見浦(下関市)などには夫婦岩のような二島がある。後者は江戸時代からの名で、『防長風土注進案』(天保13年)にも「伊勢の二見のやうに岩が二つ有之候」とある。該当しないと思われる例はもとは鹿

児島本線の駅であった肥薩おれんじ鉄道の肥後二見駅(大正14年)である。海岸ではあるが、二見川という川の河口にあたり、その川からの名らしい。

埋立地にディズニーランドが作られた浦安市舞浜(まいはま)の町名は昭和50年起立の新しい地名である。昭和57年12月に録画し58年1月に放映されたNHK教育の番組「日本語再発見」シリーズの「地名」特集の解説を担当した時に、この「舞浜」の名が話題となり、新しい名なので、浦安市役所に命名の経過を問い合わせたことがあった。市役所の企画課から明確な回答をもらったが、それによると、浦安市の名にゆかりのある「浦安の舞」の「舞」の字と海岸観光都市マイアミの名をかけて命名したという。ゆえに、「舞子」の「舞」ではないことははっきりした。その後、大阪市の埋立地に「舞洲(まいしま)」という町名ができていますが、こちらの「舞」には近くの舞子のイメージはないのだろうか。

近年の傾向としては浦安市でマイアミが想起されたように、外国語の取り入れがめだつが、次章で考察する、「～海水浴場」や「～浜」から「～ビーチ」への移行のような大量の変化は接尾語だけの変化であり、かつての「舞子」のような、各地に類型が多くみられるというような型はあまり認められない。またマイアミなどを称する外国地名をそのまま模倣する海岸名はごくまれで、今のところ、滋賀県の琵琶湖ぞいのマイアミ浜(野洲市)が確認されるぐらいである。鳥取県湯梨浜町羽合(はわい)のハワイ海水浴場なども、もともとの地元の「はわい」の名を利用している。

3 海岸の「～ビーチ」名称の全国分布(続)

本誌34号の「カタカナ書き商業地名の展開」において例を掲げて論じた、海水浴場としての海岸地名の論の続編を次に述べる。「はじめに」でも述べたように、その分布を一時代さかのぼることと、最新の例を補って現状を把握することとを提示して、ビーチ名称の増え方の確認と今後の展望とを考察するものである。

まず、1995年前後の地図資料によって、34号

海岸観光地名の分布と変化（鏡味）

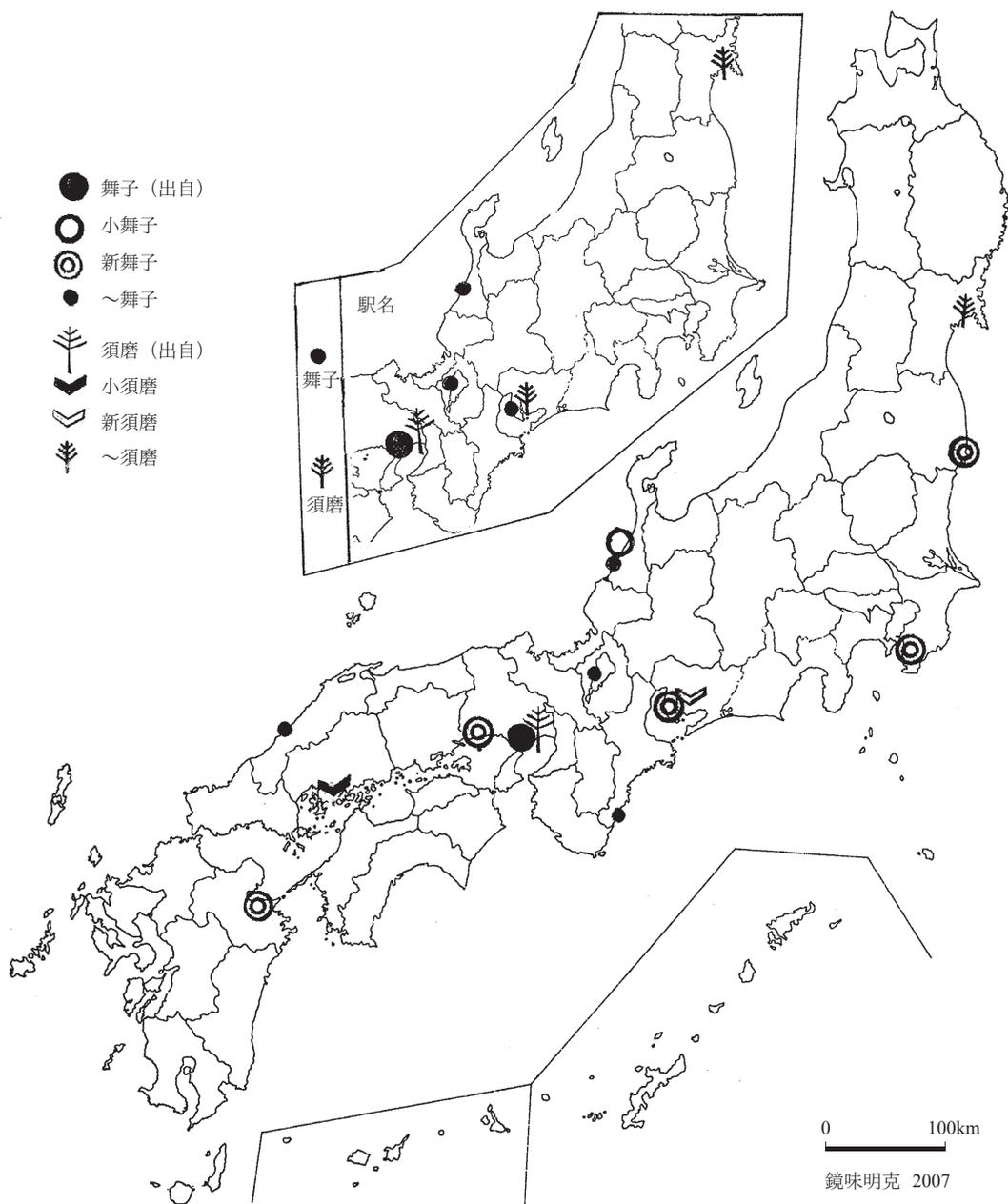


図1 海岸名勝模倣地名（舞子・須磨）

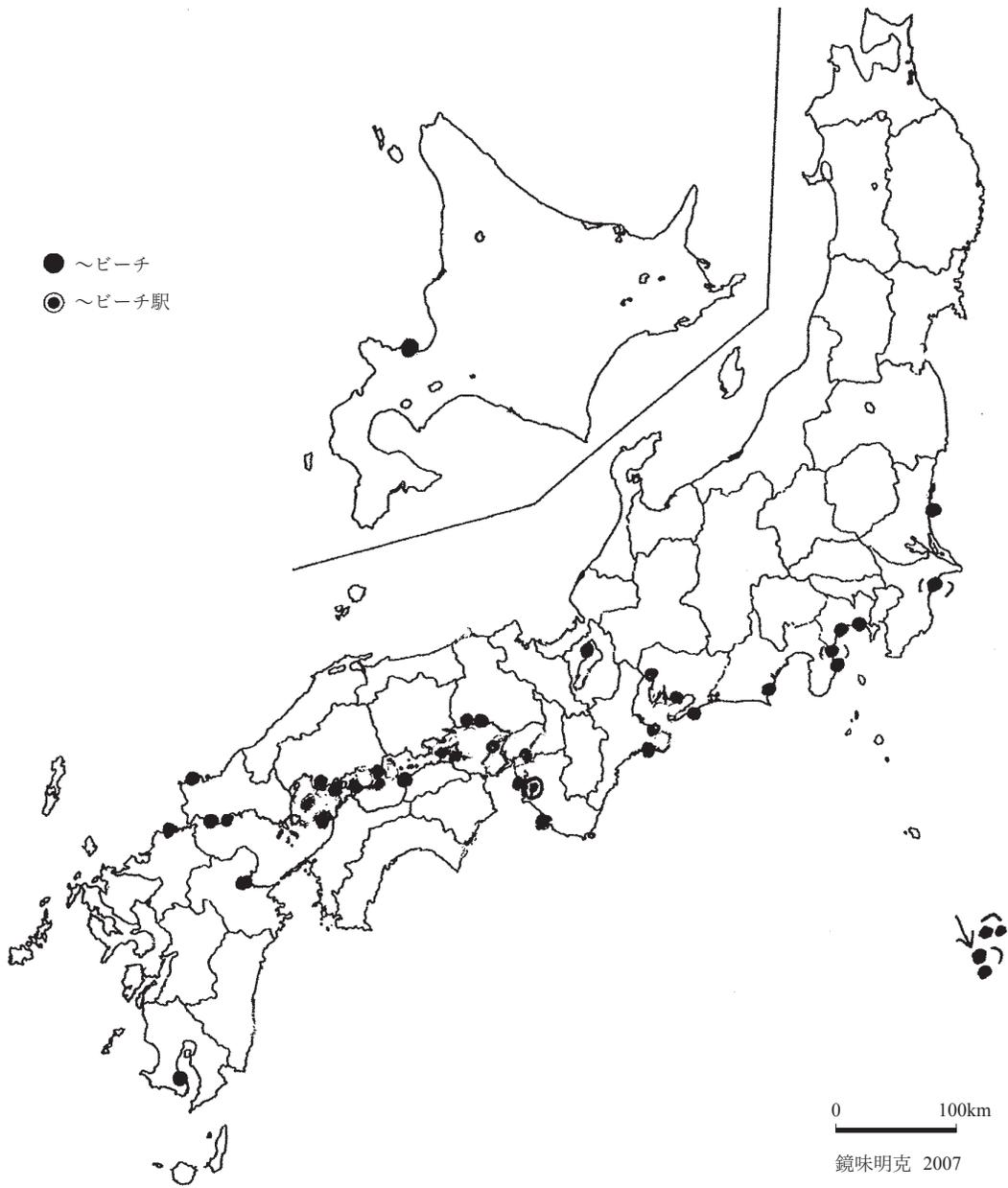


図2 1995年ごろの海岸地名「〜ビーチ」(南西諸島以外の全国)

で描いた2004年の分布図から1995年ごろにはまだ見えないものを消去した図を描く。図2はその全国図、図3はその南西諸島の図である。ただし今回の調査で、1995年頃にはすでに存在していたが、34号の図で遺漏があった若干の例は図2、

3に加えることにした。例えば、愛知県の知多ビーチランドは34号では一応施設名として省いたが、海岸に広い面積を占める名称であることから加えることにした。例として採るかどうかは、一応先回と同じ基準、すなわち、単なるホテル、レ



図3 1995年ごろの海岸地名「～ビーチ」（南西諸島）

ストランなどの施設だけの名は採らない。施設がもともとなっていたとしても、そこからその海岸の称になっているとみなせる場合は採択する、という基準である。

図4、図5は2007年現在の確認できる最新の例を34号の図に加えた最新資料による改訂図で、図4は全国図、図5は南西諸島の図である。カッコに入れたのは道路名のみ例。

2007年現在の34号に掲げた名称に増補する新確認名は次のとおりである。各県の地図資料を新しくしたほか、34号論文でも参照した、『厳選沖縄ビーチガイド』（2004年）の増補版『完全保存

版沖縄ビーチ大全』（2005年）が出たことも増補に役立った。島内の地名に詳しい『日本の島ガイド SHIMADAS』『地図帳日本の島100』や、江川善則『日本砂浜紀行』なども参照した。34号のリストアップと同じ配列で、北海道から沖縄県に至る新確認の名称を列挙する。

とままえ夕陽が丘ホワイトビーチ（羽幌町）、ビーチパーク（登別市）、厚田ビーチ、あそびーち石狩（石狩市）、ところ常南ビーチ（『JAFルートマップ北海道』。「常南」？地図の多くは「常呂前浜」）、川内まりんびーち、城ヶ沢パークビーチ（むつ市）、サンセットビーチ（青森市浅虫）、三

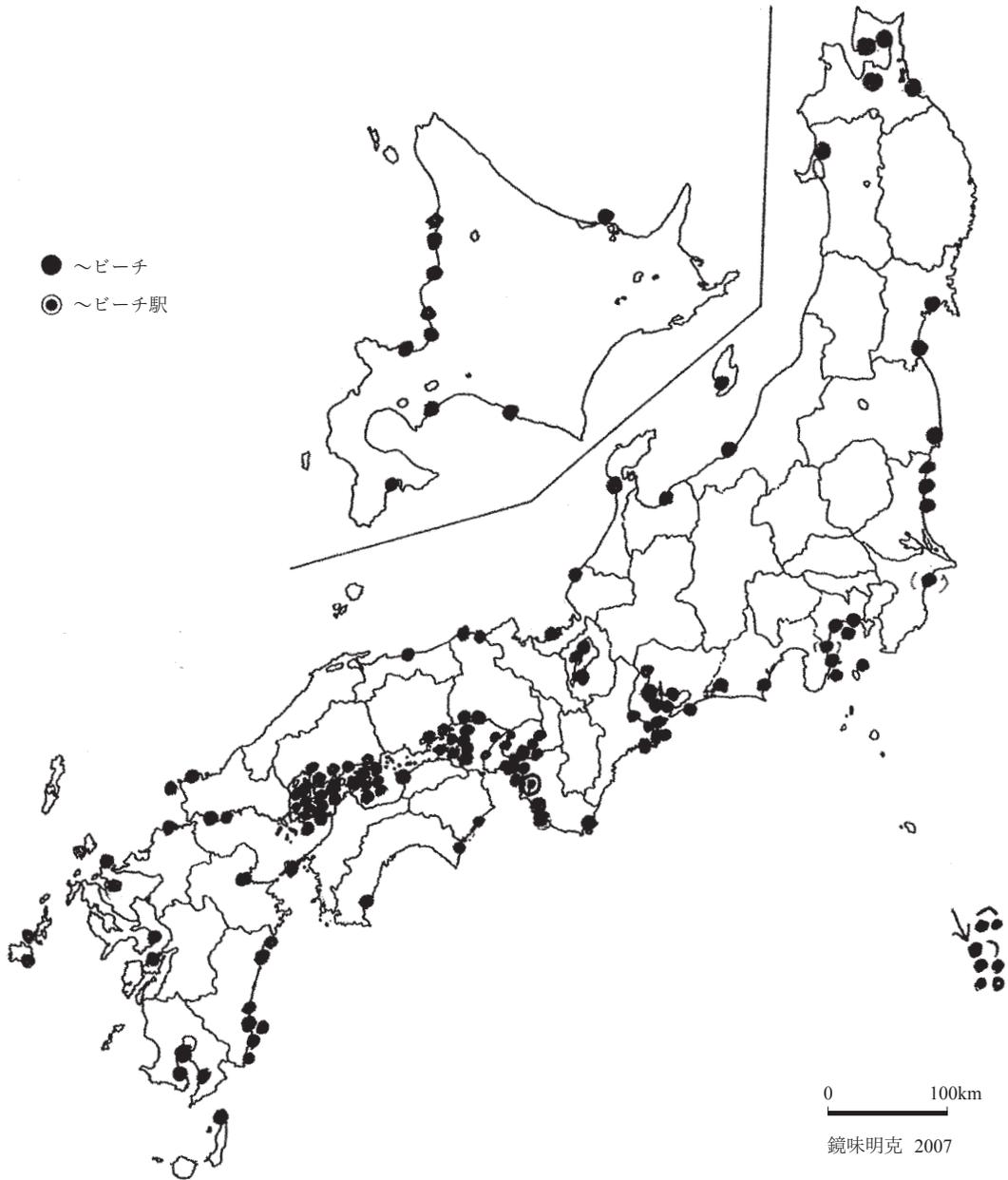


図4 現在の海岸地名「~ビーチ」(南西諸島以外の全国)

沢ビードルビーチ (三沢市), サンセットビーチ
釜谷浜 (秋田県三種町), 田代島ポケットビーチ
(石巻市), 新舞子ビーチ (いわき市), 高萩ビ
ーチガーデン (高萩市), サンビーチ日の出浜 (伊
豆大島), 湘南ひらつかビーチパーク (平塚市),

甘田サンセットビーチ (石川県志賀町), オレン
ジビーチ (伊東市), 館山寺サンビーチ (浜松市),
サニービーチ知内浜 (高島市), サザンビーチ
(泉南市), 浪早ビーチ, 浜の宮ビーチ (和歌山
市), 扇ヶ浜ビーチ (田辺市), ブルービーチ那智

海岸観光地名の分布と変化（鏡味）

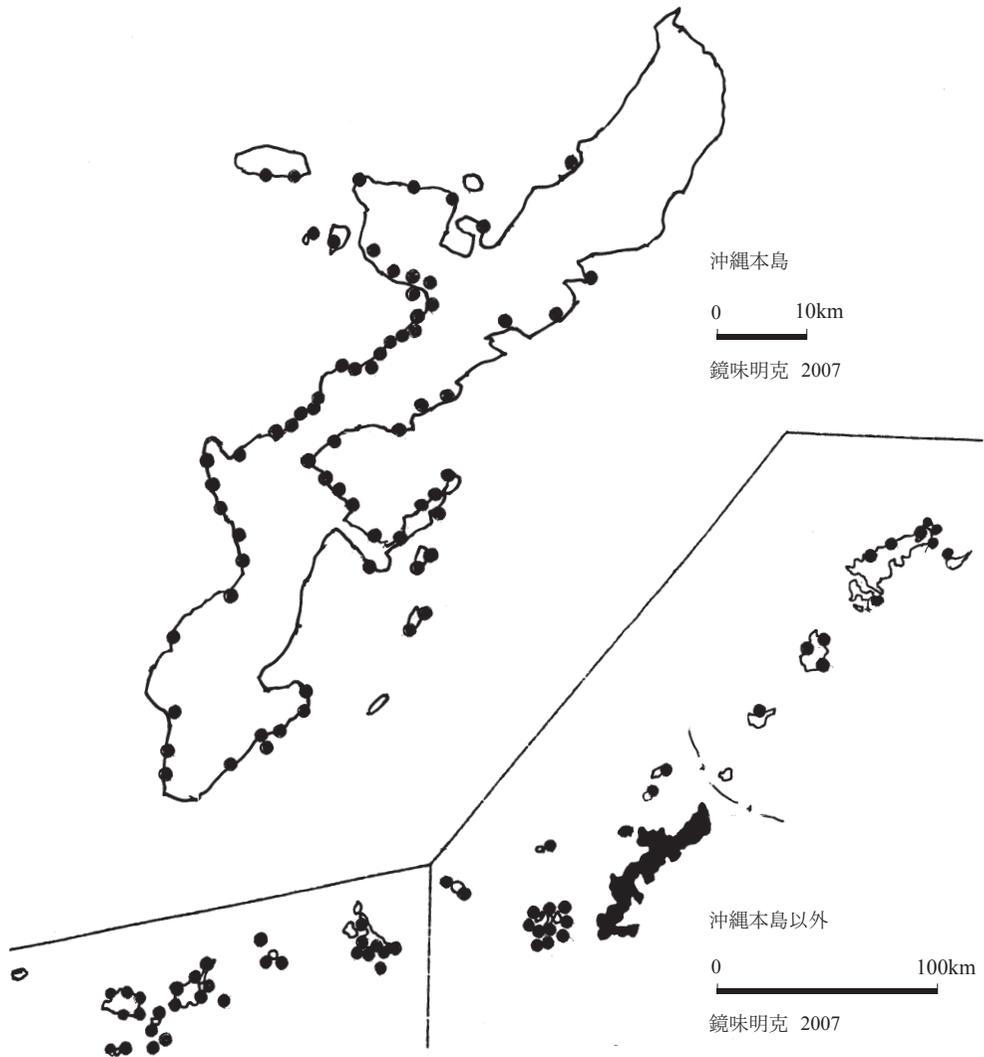


図5 現在の海岸地名「～ビーチ」（南西諸島）

(和歌山県那智勝浦町)，城崎Kビーチ（豊岡市。もと「気比（けい）の浜」で，その「けい」をKとしたらしい），大浜ビーチ（福山市横島），クレセントビーチ（福山市田島），ファミリービーチ（竹原市大久野島），しまなみビーチ（因島市），ロマンチックビーチかるがはま（呉市），笹子島ビーチ（呉市倉橋島），梶ヶ浜ビーチ（呉市下蒲刈島），サンビーチ（江田島市），しおかぜコバルトブルービーチ（山口県下関市角島），イナビー

チ，オーシャンブルービーチ，瀬戸サンビーチ（香川県小豆島），ムーンビーチ井野浦（愛媛県伊方町），平野サーファービーチ（四万十市），小友浜キャランコビーチ（唐津市），ツインズビーチ（壱岐市），ビーチロック，香珠子ビーチ（五島市），下阿蘇ビーチ，サンビーチすみえ（延岡市），青島ビーチ，白浜ビーチ（宮崎市），栄松ビーチ（宮崎県南郷町），桜島レインボービーチ（鹿児島市），ゴールドビーチ大浜（鹿児島県南大隅町），

ベラビーチ浦田（西之表市）、タマナビーチ、万作ビーチ、キャベツビーチ（小笠原兄島）、ジニービーチ（父島）、ワイビーチ（母島）。以上が図4の範囲である。

図5（南西諸島）については、スギラビーチ（鹿児島県喜界島）、用ビーチ、土盛ビーチ（奄美市）、倉崎ビーチ（奄美大島龍郷町）、タートルビーチ加計路麻（加計呂麻島）。以下沖縄県で、ウップマビーチ（東村）、21世紀の森ビーチ、嘉陽ビーチ、ザブセナテラスビーチ、宇茂佐ビーチ（名護市）、渡具知ビーチ（読谷村）、浜原ビーチ、ルネッサンスビーチ、リザンビーチ（恩納村）、昆布ビーチ（具志川市）、市民公園ビーチ（石川市）、以上が、沖縄本島の図中で、以下は下図の離島部である。長浜ビーチ（粟国島。「ウーグの浜」「ウーグ砂浜」とも）、北浜ビーチ、ひずしビーチ（阿嘉島）、ヒジュイシビーチ、ウラビーチ（渡嘉敷島）、マイバマビーチ、ブリーズベイビーチ（宮古島）、石垣島サンセットビーチ（石垣島）、イーストビーチ（由布島）、南風見田浜ビーチ、月ヶ浜ビーチ（西表島）、はいむるぶしビーチ（竹富島）、ハイバマビーチ（波照間島）。以上の新確認の例を34号の図に加えて、最新の2007年の図とする。

なお、沖縄県の諸例について、いくつか34号の記載に要訂正があったので、以下に掲げておく。名護市の川喜瀬ビーチとあるのは、喜瀬ビーチが正しく「川」を取る。与久田ビーチは恩納村、かりゆしビーチは名護市に入れる、与那城町の海岸道路ビーチは海中道路ビーチが正しい。具志川市の字検ビーチとあるのは宇堅ビーチが正しい。与久田ビーチ（恩納村）、奥武ビーチ（玉城村）は前からあったものの記入漏れであった。以上を訂正する。

また、市町村合併等による、行政区名の変更は多数にわたっている。34号にビーチの例を挙げた主なものについて、現在は兵庫県御津町は「たつの」市に、広島県の沖美町は江田島市に、安浦町は呉市になっている。沖縄県では与那城町が「うるま」市に、知念村が南城市になっている。

4 分布図の読み取り

図2から見て行く。1995年頃の分布状況は、図のように、北海道から九州まで全国規模ですてにみられるが、北海道は中心部の1例「おたるドリームビーチ」だけである。本州についてはとくに日本海側のゼロが目立つ。有無はかなり県別にも異なり、広島県はすでに顕著に例があったのに対して、岡山県はゼロである。東京付近では大磯ロングビーチのような著名なものもあるが、関東全体では多くはない。海水浴場の多い千葉県でも道路名一つだけで、現在でもビーチ名は生れていない。和歌山県の広川ビーチ駅は1995年の時点ではすでにできているが、古いものではない。開駅は1993年である。図3の南西諸島については1995年ごろと2004年とはほとんど相違がなく、十数年前もすでに図のように全域的にビーチの命名があったことがわかる。もちろん最西端の与那国島はビーチの流行が未到達で、図5の現在でもそれは変わらない。すべて「～浜」であった。波照間島ももは「～浜」のみであった。34号の図で西浜ビーチ、今回の調査でさらに、ハイバマビーチを新しく確認している。

図4の最近の例を補った全国図を見ると、34号の図に比べて全国的な広がりがより顕著になっている。とくに北海道にも各地に例が増えたこと、東北地方の増加がめだち、全国分布がより拡充したことが読み取れる。広島県での命名がさらに多くなったこと、大阪湾から和歌山県、伊勢湾付近等の増加が著しい。山陰の希薄は今日も変わらないが、施設名として図には採らなかつた米子市皆生温泉のサニールンドビーチというテニスコートとか、益田市の三里が浜のビーチハウス（店名）などは、ビーチ名使用の萌芽ともいえよう。

5 まとめ

「海水浴場」とか「浜」と称してきた海岸を現代の流行としてビーチと呼ぶ事例は年を追って全国に拡大している。沖縄県においては最も顕著にそれがみられるが、地図上で例を採集しながら観察するに、このようにビーチ名称があふれなが

ら、従来からの「～浜」などの名称が全くなくなったわけではなく、最多分布域の沖縄本島でも、海水浴適地でない海岸はビーチと呼ばれておらず、また海水浴場でも「～浜」で呼ばれているところもある。おそらく最近開発の手が入ったところほど新しくビーチ名称をつけるのであろう。そのような傾向は、東京付近の多くの海水浴人口をかかえた関東平野の各地についても観察されるが、その中で千葉県が例外が目される。1995年ごろの図でも現在の図でも房総半島に多くの海水浴場をかかえた千葉県においては、ビーチ名称が皆無である。1か所のみ符号が見えるのは、直接の海岸名ではなく、自動車道路としての「九十九里ビーチライン」である。これが唯一の例であるが、自動車道路という制限付きであるから、図上ではかっこをつけてある。熱海市付近の「熱海ビーチライン」も自動車道路で同様にかっこに入れて扱った。最も熱海市には「熱海サンビーチ」というこれははっきりした海岸名も存在する。千葉県の場合は古くから開発された海水浴場が多く、ほとんど「～海水浴場」と呼ばれ続けていることがこのようなビーチの空白の理由と思われる。むしろ東京からやや距離のある、最近到達時間が短縮されて、新たに海水浴場を開発したような地域にビーチの新名称が多いのであろう。なお、東京千葉間の海岸は埋立地が海上に張り出して、海岸線の変化が著しいが、それらの新海岸に造成された「人口海浜」にはビーチ名称は見えない。「幕張の浜」「検見川の浜」「いなげの浜」と「～の浜」型が採用されている。京阪神から海水浴客が多い若狭湾にビーチがほとんど見えないことも注目した。この地域も「～海水浴場」の名が早く固定したとみるべきであろうか。なお、琵琶湖の水泳適地についてはさすがに「海水浴場」とはいわない。ほとんどすべて「～水泳場」としている。ビーチ名称は高島市のマキノサニービーチ高木浜、サニービーチ知内浜、大津市のサンシャインビーチである。関東とは対照的に、大阪付近では大阪湾、和歌山などの近場の海岸で、従来の海水浴場の間隙に小規模の新しい海水浴場が多

く新設されて、ビーチ名を新しく名乗っている傾向が見られる。広島県のビーチ名の多さはどう解すべきか。瀬戸内海の特徴としてほとんどの海水浴場が島の海岸で、そのことは岡山県でも同じ条件であるが、岡山県ではビーチ名はほとんど流行しておらず、広島県の場合は県単位の共有性・県内流行としてビーチ名が付けられたと見るほかはない。

ビーチ名称は今後も海水浴場が新設または再開発される機会に増え続けるであろう。いわき市の新舞子の海岸も、新舞子の名を残しつつ「新舞子ビーチ」と称されるようになった。横文字化はさかんだが、「マイアミビーチ」のような外国地名の生模倣はほとんど見えないので、大勢は地名を冠しないサンビーチ・パールビーチなどの外国語の非固有名詞による表現用法、地名がつくとしたらその前に地元の名を付した「熱海サンビーチ」のような型が基本になっている現状が続くのではなかろうか。そして、前から指摘しているように、本来は単に「海岸」をいう「ビーチ」が、観光名称として、「海水浴場」という和製英語とも、国訓ともいえる用法として、現代日本語に定着しつつあるのである。

引用文献（掲出順）

- 鏡味明克（1991）「温泉と海水浴場の駅名」『鉄道文学』第4号 三重大学鉄道文学研究会
 鏡味明克（1995）「関西型通称地名の分布と動態」『関西方言の社会言語学』世界思想社
 鏡味明克（2005）「カタカナ書き商業地名の展開」『愛知学院大学文学部紀要』第34号
 洋泉社 MOOK（2004）『厳選沖繩ビーチガイド』洋泉社
 富山義則（2005）『完全保存版 沖繩ビーチ大全』洋泉社
 日本離島センター（2004）『日本の島ガイド SHIMADAS』第2版（初版1998）
 山と溪谷社編（2006）『地図帳日本の島100』
 江川善則（2002）『日本砂浜紀行』日本図書刊行会
 その他、各県別地図帳、観光ガイドブックなどの最新版ならびに1995年ごろのもの各種